

原始佛教に於ける四念處の研究

増 永 靈 凤

【一】

あらゆる宗教が自己の現實的反省と其れに基く生命の根本的要求に出發することは宗教學者の均しく是認する所である。而して佛教は無常にして無我なる現實相を捉へて、是を苦なりと判断し、其の苦より脱することを以て究竟の目的としたのである。苦の解脱は其の根據たる無明愛欲の滅盡を意味するが故に其れ自身人格の完成である。かかる目的實現のために其の方法として正しき實踐の道が選ばれねばならないであらう。併し行者必ずしも機根を同うするものにあらざるが故に、修行道は必然的に多岐に涉らざるを得ないのである。今より究めんとする四念處(*cattāro satipaṭṭha-*
ṇa) 四念住・四意止・四憶處)も亦かかる要求より生れたる行法であつて、原始佛教は固より一般佛教に於て重要な地位を占むるものである。而して其の古き文献は(1)巴利長部二二大念處經・同中部一〇念處經・同相應部五の三念處相應及び漢譯中阿含二四卷念處經・雜阿含二四卷・增一阿含壹入道品等を初めとして、經典の各處に見出すことが可能である。

これは身・受・心・法の四を對象として、それを如實に知らんとする禪觀の一形式である。若し是を發達史的に考へるならば可成り變遷の跡が見出されるであらう。單に原始佛教と部派佛教との間に於ける相違のみならず、阿含部そのものに於てすら其跡を留めてゐるのである。部派佛教で(一)身・受・心・法に四顛倒克服を配當すること(二)總相別相の二種に區分すること等は阿含部に於て推論はされても文献的に明白ならしむることが出來ない。更に佛陀自身に於ても初めよりかかる統一ある組織を作り出されたものでなく、個々に説かれたものが後に綜合されたのであらうと思はれる。蓋し是等四つの中に含まる思想は既に佛陀自ら斷片的に屢々説かれたところであるからである。加之前に掲げたる經典中にも、其の説明の程度に於て可成り差異が存するのである。さりながらこの組織が相當古き層に屬するものであることは阿含部自身に念處經の如き註解が存する事實によつても明かであらう。固よりこの行法は一種の禪觀に基礎を置くものであるが、かの四禪の如く外學に起原を持つものでなく、佛教自身の組織によることは明白である。阿含中に存する四念處を其の目的若しくは包攝關係より分類するならば(一)一趣道(二)自燈明自歸依・法燈明法歸依(三)善法聚(四)一切法等の内容となすことが出来るであらう。是を一趣道・一道・一入道・一乘道の内容とする文献は漢巴兩念處經を初めとして、其數甚だ多きにのぼつてゐる。一例を擧ぐるならば「有_ニ一道。淨_ニ衆生。度_ニ憂畏。減_ニ苦惱。斷_ニ啼哭。得_ニ正法。謂四念處」(中阿含二四卷念處經)「有_ニ一乘道。淨_ニ諸衆生。令_ニ越_ニ憂悲。減_ニ惱苦。得_ニ如實法」(雜阿含二四卷六〇六經)⁽⁷⁾「この一趣道即ち四念處は衆生を淨くするため悲哀を越ゆるため、憂悲を盡すため、智慧を得るため、涅槃を實證するためなり」(巴利念處經)とあるが如きである。是を大毘婆沙論百八十七卷は慧を體とする自性念住 (svabhāva smṛti

upasthāna) と名づけてゐる、自燈明自歸依法燈明法歸依の内容として、擧げらるる文献は、「阿難當知。如來不^レ久。亦當^ニ過去。是故阿難。當^下作^ニ自洲^ニ而自依^レ。當^下作^ニ法洲^ニ而法依^レ。當^レ作^下不^ニ異洲^ニ不^レ異依^レ。阿難白佛。世尊。云何自洲以自依。云何法洲以法依。云何不^ニ異洲^ニ不^レ異依^レ。佛告^ニ阿難⁽⁹⁾。若比丘身身觀念處。精勤方便。正智正念。調^ニ伏世間貪愛。如^レ是外身内外身受心法法觀念處。亦如^レ是說⁽¹⁰⁾〔雜阿含二四卷六三八經〕「阿難陀よ。それ故に自己に歸依し、他に歸依することなく、法を燈明とし、法に歸依し、他に歸依することなくして住せよ。阿難陀よ。比丘は如何にして自己を燈明とし、自己に歸依し、他に歸依することなく、又法を燈明とし、法に歸依し、他に歸依することなくして住するや。阿難陀よ。茲に比丘身に關して身觀に住し、精勤にして正智正念、世間の貪と惱とを調伏すべし。受・心・法に關して受心法觀に住す。云々」〔巴利長部一六大般涅槃經〕とあるが如き是である。是に關しては後更は論述する機會を持つであらう。次に善法聚の内容とせらるる文献は雜阿含二四卷六一一經六一三經巴利相應部四七の五等に見出され得る。「云何爲^ニ善聚。謂四念處。所以者何。純善滿具者。謂四念處。是名^ニ善說」〔雜阿含二四卷六一一經〕「比丘等よ。善聚とは四念處なりと說かばそは正說なりとす。全き善聚は四念處是なり」〔應部四七の五〕とあるが如きは其の例證である。是を大毘沙婆論⁽¹²⁾は慧と所餘の俱有とを體とする相雜念住 (samsaraga smṛty upasthāna) と名づけてゐる。次に一切法の内容と見らるる文献は雜阿含二四卷六三三經に「所說一切法。一切法者。謂四念處」とあるが如き是である。俱舍論⁽¹³⁾三卷は雜阿含二四卷六〇九經の「我今當^レ說^ニ四念處集、四念處沒^ニ、諦聽善思。」即ち相應部四七の四二に於ける「比丘等よ。我四念處の集と沒とを說かん」を擧げ婆沙と同じく、慧の所緣法を體とする所緣念住 (*a'ambana*

smṛty upasthāna) の例證となしてゐる。こは論事(Kathāvatthu) 一品の九に對する佛晉の註によれば安達派(Andhaka) が一切法は念處なり (sabbe dhammā satipatthāna.) と主張せし權證とされてゐる。併し上述の雜阿含には明かに「一切法者。謂四念處」と載せてあるのであるから必ずしも四念處の集沒を説く經を引證する要はないであらうと思はれる。けれども各經典の成立乃至存在の如何を徹底的に論ぜざる限り、右の主張を強調することは蓋し困難であろう。異部宗輪論說一切有部の教義中にも「四念住能攝一切法」⁽¹⁷⁾ と説いてゐる處より推すに、こは説一切有部によつても唱へられたる意見であるといつてよいであらう。四念住の内容を見るに是を一切法となすも敢て差間ないと考へられる。

婆沙では右に舉げたる三念住が如何なる有情のために説かるるやに就て論じてゐるが、中に就て吾人の重要視せんとするものは、自性念住として掲げらるる四念處の目的そのものである。巴利文の多くは（一）衆生淨化（二）憂悲惱滅盡（三）智慧獲得（四）涅槃實現乃至苦滅への道となしてゐる。相應部四七の一八及び同四三等には「生の滅盡邊際を見、慈愛にして悲心ある者こそ一乘道を知るなれ。この道によりて、過去のもの既に暴流を渡れり。未來のものも渡らむ。現在のものも渡るなり」との偈が見出される。婆沙は一趣道と名づくる所以を（一）一界の超越（二）一生の超越（三）一諦の通達（四）一究竟への趣向（五）一道のみあるの五を擧げ、舍利弗阿毘曇論一二卷は九種を掲げ最後に「欲を離れ、寂靜にして正覺を修し、惡を滅して涅槃を得る」となしてゐる。

相應部四七の三二にも「是こそ十全の厭忌・離貪・滅・止息・正智・覺・涅槃に導くなり」とあつて其の目的乃至結果を明

示してゐる。是を要するに四念處の究竟目的とする所は、佛音が一趣道の意味を煩惱を滅盡するもの (kilesānam khaya-bhūtam) となしてゐる如く、涅槃即ち自主にして自由、自由にして自律的な人格の完成に存する。されば相應部四七の三一には「、」は身に關する身觀なりと未だ曾て聞かれたることなき法に就て、我に眼生じ智生じ慧生じ明生じ光明生じたり、受・心・法に關する受・心・法觀なりと「」と述べてこの法による成道を明示してゐる。この文献は四聖諦に於けると同一手法によつて書かれたものである。思ふに四念處には四聖諦も含まれてゐるから、後に到つてかく言はるやうになつたのであらう。四念處が成道を可能にする道として權威づけらるるや、この行法は一段と重要さを増して來るのである。

- (1) D.N. vol. II. p. 290 (3) M.N. vol. I. p. 56
(3) S.N. vol. V. p. 141 (4) 大正一卷五八一頁
(5) 大正二卷一七〇頁 (6) 大正二卷五六八頁
(7) 大正二卷一七二頁 (8) 大正二七卷九三六頁
(9) 大正二卷一七七頁 (10) D.N. vol. II. p. 100
(11) 大正二卷一七一頁 (12) S.N. vol. V. p. 146
(13) 大正二卷一七五頁 (14) 緩減收十、七十六丁裏（此四念住由何故集、由何故滅）
(15) S.N. vol. V. p. 181 (16) vol. I. p. 155
(17) 緩減四、七七丁表 (18) S.N. vol. V. p. 168

(19) 大正二七卷九四三頁

(20) 大正二八卷六一二頁

(21) S.N.vol.V.p.179 (無爲道としては S.N.vol.V.p.183)

(22) S.N.vol.V.p.179

【II】

次に漢巴兩資料によつて、其の内容を検討して見やうと思ふ。巴利文と漢譯とを比較するに前者は明瞭さに於てすぐれてゐる。其の掲ぐる項目には漢巴必らずしも一致せざるもののが存する。巴利念處經は身念處を分つて(一)念安般(二)威儀(三)正知(四)厭逆作意(五)界作意(六)死屍觀とする。漢譯のそれでは(一)威儀(二)正知(三)斷惡(四)治心(五)念安般(六)離生喜樂(七)定生喜樂(八)無喜生樂(九)淨心遍滿(一〇)光明想(一一)華觀相(一二)厭逆作意(一三)界作意(一四)以下(一八)迄、死屍觀等所謂十八念身である。身念處に於て重要な地位を占むるものは念安般・厭逆作意・死屍觀(不淨觀)であらう。念安般は(一)正念にして出入息し、(二)出入息の長きを知り(三)出入息の短きを知り(四)全身を認知して出入息し(五)身行を靜めて出入息すべしと修するにある。漢譯が更に口行の寂止を加へてゐる點に於て巴利と相違する。

(1) 俱舍論等には息を數へて一より十に至ると述べてゐるが右の文献には勿論是を見出しえない。この方法は古代印度のプラーナに對する神祕觀とは異り、調息によつて心の散亂を離れ以て法を如實に觀せんとするにあるのである。次の威儀には(一)行けば行くと知り、(二)住まれば住まと知り(三)坐せば坐すと知り(四)臥せば臥すと知るの四を擧げ、其

の身の置かるる所を如實に知ると結んでゐる。漢譯は四威儀の外に(五)眠則知_レ眠_二、(六)寤則知_レ寤_二、(七)眠寐則知_ニ眠寐_一の三を加へてゐる。次に正知に於ては(一)前進後退を正知して行ひ(二)前觀後觀を正知し(三)屈伸を正知し(四)僧伽梨衣・衣鉢を携ふるに正知し、(五)食・飲・噉・味及び大小便行を正知し(六)大小便行を正知し(七)行・住・坐・眠・寤・語・默を正知して行ふ等を擧げてゐる。漢譯には飲・噉・味及び大小便行がない。但し臥は漢譯にあるが巴利には存しない。厭逆作意は全身の各分並びにそれらが不淨物に充满せらるるを觀するので巴利には其の例として(一)髪(一)毛(三)爪(四)齒(五)皮(六)肉(七)筋(八)骨(九)髓(一〇)腎臟(一一)心臟(一二)肝臟(一三)肺膜(一四)脾臟(一五)肺臟(一六)胃臟(一七)大腸(一八)小腸(一九)大便(二〇)膽汁(二一)痰(二二)膿汁(二三)血液(二四)汗(二五)脂肪(二六)涙(二七)漿液(二八)唾(二九)洟(三〇)關節滑液(三一)小便を數へてゐる。長部二三大念處經中部一一九念身經等も右と同様であるがクッダカ・バー_タ⁽²⁾の三十二身分に比較すれば漢譯相當經にあぐる腦及腦根即ち腦髓 (mattalaka mattaluniga) ⁽³⁾ が缺けてゐる。漢譯も三十一で巴利の關節滑液(lasika)を入れてゐない。增一阿含壹入道品は毛髮爪齒皮肉筋骨髓腦脂膏腸胃心肝脾腎屎尿生熟二臓目淚唾涕血脈肪膽を載せてゐるが先の經典とは必らずしも一致しない。順正理論五九卷には三十六種の不淨物を數へてゐる。是等は何れも不淨なるが故に貪欲の對象とすべきではないことを力説する。次に界作意に於て巴利は身の四大としてゐる。勿論原素に六種を擧ぐる思想は既に巴利に見出し得る所であつて、中部一一五多界經同一四〇分別六界經の如きは其の好例である。巴利では最後に塚間に於ける死屍觀を擧げてゐる。是塚間に捨てられたる屍が膨脹・青瘀・膿

爛・鳥獸食噉・虫類食噉・血塗・散亂・斬斫離散・骸骨等の経過を取る状態を觀念して、貪欲を離れんとするのである。

佛晉のビスツ・ディマツガには是を(一)膨脹(二)青瘀(三)潰爛(四)斷壞(五)食噉(六)散亂(七)斬斫棄擲(八)血塗(九)虫臭(一〇)骸骨の十相となし大智度論二卷には(一)脹相(二)壞相(三)血塗相(四)膿爛相(五)青瘀相(六)噉相(七)散相(八)骨相(九)燒相の九相となしてゐる。阿含に於ては右經過の順序を確然と分類するには到つてゐないと思ふ。漢譯念處經にはこの外更に他のものが附け加へられてゐる。就中(六)離生喜樂(七)定生喜樂(八)無喜生樂(九)淨心遍滿はその挙げられる譬喻より推して、四禪そのものであることを知るのである。蓋しその譬喻は巴利長部二沙門果經同中部三九大馬邑經長阿含一三卷阿摩晝經等に四禪を説ける後に加へらるるものと全く同一であるからである。

次に受念處に關して巴利は(一)樂受を感じて樂受を感ずと知り(二)苦受(三)不苦不樂受(四)物質的肉體的樂受(五)非物質的(精神的)樂受(六)物質的苦受(七)非物質的苦受(八)物質的不苦不樂受(九)非物質的不苦不樂受を感じて是等を感ずと知ると言つてゐる。漢譯では(一)樂覺(二)苦覺(三)不苦不樂覺(四)樂身(五)苦身(六)不苦不樂身(七)樂心(八)苦心(九)不苦不樂心(一〇)樂食(一一)苦食(一二)不苦不樂食(一三)樂無食(一四)苦無食(一五)不苦不樂無食(一六)樂欲(一七)苦欲(一八)不苦不樂欲(一九)樂無欲(二〇)苦無欲覺(二一)不苦不樂無欲覺を擧げてゐる。佛晉は受を説明して「受は感受を相とするものにして境味食味を味ふ働きとし苦樂を現れとし觸を近因とするものなり」となしてゐる如く、受は觸を足場とするものであつて感覺に感情を伴へる作用である。

次の心念處に就て巴利は(一)心貪ならば心貪なりと知り(二)心貪を脱すれば心貪を脱すと知り(三)心瞋ならば……

(四)心瞋を脱すれば……(五)心癡ならば……(六)心癡を脱すれば……(七)心顛倒せば……(八)心顛倒せざれば……(九)心廣大ならば……(一〇)心狭小ならば……(一一)心有上ならば……(一二)心有上ならざれば……(一三)心寂靜ならば……(一四)心寂靜ならざれば……(一五)心解脱せば……(一六)心解脱せざれば心解脱せずと知るとなしてゐる。漢譯は(一)有欲心(二)無欲心(三)有恚心(四)無恚心(五)有癡心(六)無癡心(七)有穢汚心(八)無穢汚心(九)有合心(一〇)有散心(一一)有下心(一二)高有心(一三)有小心(一四)有大心(一五)修心(一六)不修心(一七)定心(一八)不定心(一九)解脱心(二〇)不解脫心の覺了を説く。ここに所謂心とは如何なるものであるか。相應部⁽¹²⁾の六一無聞經には「心(citta)とも意(mana)とも識(vināṇī)とも言はる」とあつて、必らずしも相互の意味を限定してゐないが、併し其の作用の點より言へば情意的方面を主としてゐるものと思ふ。婆沙論七十二卷には心意識に就て幾多の區別を擧げてゐるが、原始佛教ではそこまで進んでは居ないのである。右に述ぶる内容より推すに何れも情意的方面に關するものであることは注目に値する。

最後に法念處に就て先づ巴利は(一)五蓋(二)五取蘊(三)十二入(四)七覺支(五)四聖諦を擧げ、其等の正しき認識を説いてゐる。漢譯は(一)十二入(二)五蓋(三)七覺支を述べ、五取蘊及び四聖諦を擧げてゐない。又增一阿含五卷壹入道品は五蓋と四禪とを擧げてゐるのみである。五蓋は行者の心を覆蓋するものであつて、貪欲・瞋恚・睡眠・調悔・疑是である。⁽¹⁴⁾これは善見律毘婆沙等が示すごとく初禪に於て捨つべき惡不善法の内容とされてゐるのである。かかる五蓋の内心に於ける有無・未生五蓋の生起・已生五蓋の捨滅・已滅五蓋の不生等に就き如實に是等を觀察する。次に五蘊は我々の

身心を分析して得たる構成要素であつて早き時代より整理されたものである。佛教では五蘊そのものを客觀的に又は科學的に取扱ふことを主とするのではない。それらは悉く主觀的な取 (*upadana*) の對象となるものであるから、名づけて五取蘊となすのである。蓋し取は愛が直接五蘊に關係して具體的となつたものをいふのである。行者は(一)こは色なり(二)こは色の集なり(三)こは色の滅なりと如實に知り、更に受・想・行・識に就ても同様なる觀念をなすのである。

次に十二入に關する法念處を説く。即ち行者先づ(一)眼を知り(二)色を知り(三)眼色に緣りて内結生ずるを知り(四)未生の内結生ずるを知り(五)已生の内結捨てらるるを知り(六)捨てられたる内結未來に生ぜざるを知り、更に耳・鼻・舌・身・意並びに聲・香・味・觸・法に關しても同様なる行法をなすのである。ここに所謂意根は殆んど第六意識と同義であつて特に對象を緣取する機關といふ點より根と名づけられたものであらう。是等の感覺機關とその對象とを佛教は決して科學的に問題とするのではなく、それらの關係によつて生ずる結縛を如何にするかに重點を置いてゐるのである。前の五蘊十二處に十八界を加へて、萬有の分類法となすることは既に早き時代より唱へ出された所である。次に擧げらるるは七覺支である。即ち行者は(一)内に念覺支あらば内に念覺支ありと知り(二)内に念覺支なければ内に念覺支なしと知り(三)未生の念覺支生ずるを知り(四)已生の念覺支増修成滿せらるるを知り、更に擇法・精進・喜・輕安・定・捨に就ても同様に正しき認識をなすのである。ここに所謂菩提分とは相應部四六の一四等に存する如く、行者をして上智・覺・涅槃に導くべき行法とされてゐるのである。最後に述べらるるは佛教の宗教的意義を最も克明に表現せる四聖諦である。

經典には比丘(一)こは苦なりと如實に知り(二)こは苦の集なりと如實に知り(三)こは苦の滅なりと如實に知り(四)こは

(16)

苦滅に導く道なりと如實に知るなりと言はれてゐる。四聖諦を説く最古の經典は言ふまでもなく漢・巴・梵・藏何れにも存する轉法輪經⁽¹⁷⁾であり、その註釋經は阿含中に存する分別聖諦經⁽¹⁸⁾である。この教説は古來佛陀が成道後五比丘に對して試みられたる最初の説法内容とされてゐる。けれども經典自身の構成の次第乃至周圍の諸經緯より推して見るにこの教説なるものは初轉法輪の場合に於ける説示にあらずして、相當時日を経過する中に組織されたものと思はれる。その成立年代は暫く措くとするも、古來この教説は象の足跡にも比せらるる如く、佛教のあらゆる教理を内包して餘すところがない。故にこの教説の眞義を捉へることは廳て佛教自體の根本的立場と其の宗教的意義とを明かにすることとなるであらう。今巴利經典に多き型を擧げれば次の如くである。

(一) こは實に苦聖諦なり。生も苦なり、老も苦なり、病も苦なり、死も苦なり、不愛者と會ふも苦なり、所愛者と別れるも苦なり、求めて得ざるも苦なり、略して言へば五取蘊は苦なり。

(二) こは實に集聖諦なり。凡て再生的にして喜貪を作ひ、到る處に満足を求むるこの愛是なり。即ち欲愛・有愛・無有愛なり。

(三) こは實に苦滅聖諦なり。凡そ其の渴愛の完全無雜の滅・捨離・出離・解脫・無著是なり。

(四) こは實に苦滅道聖諦なり。即ち是聖八支道にして正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定なり。(S.N.vol.V. pp. 421-4 2)

中に就て苦諦は苦なる人生の現實相を示し、集諦はその苦のよつて來る理由根據を擧げ、滅諦は無苦安穩なる佛教の

目的を教へ、道諦は其の目的を實現する方法としての實踐を指すのである。この教綱に於て重要な役目を果すものは苦諦と滅諦とである。而して集諦と道諦とは上二諦の間にあつて內面的に必然關係をなすのである。集は苦に近づく力であり又滅に遠ざかるそれである。道は滅に近づく力であり又苦に遠ざかるそれである。苦と滅との對立の隔りは常に動いてやまざるものである。集はその隔りを擴大する因子となり、道はそれを縮少する因子となるのである。是等の關係を明かにするならば佛教は神の宗教にあらずして人間の宗教であり、天啓に基く宗教にあらずして、自覺に基く宗教である所以が理解せらるるであらう。相應部(19)一二の一增(20)支部三の六一には十二因縁の順觀を集諦に配し逆觀を滅諦に當ててゐる。蓋し順觀は如何にして苦が存するかの根據を示すものであり、逆觀は如何にして苦が滅するかの所以を示すものであるからである。かくの如く四聖諦は佛教を代表する教説なるが故に相應部五六の二〇雜阿含一六卷四一七經等には四聖諦の一を眞實・不虛妄・不異なりとして權威を附してゐる程である。後にはこれによる成道の可能をも説くに到つてゐるのである。

以上念處經は身・受・心・法に就て、内外・内外の三様式によつて如實に觀察し、以てこの修行道の目的を實現せんことを力説してゐるのである。かかる行法を修行者自身の機根と精進との如何によつて七年乃至一年、七月乃至半月、半月乃至七日の間實踐すれば必ず現世に於て智を得或は餘依(21) 残るも阿那含果を得ると言はれてゐる。漢譯は更に期間を短縮して一日一夜の昇進に言及してゐる。但し半月は擧げてゐない。餘依や阿那含等を説く點は稍教説が固定化して來た事實を物語るものである。

- (1) 総藏收十・七六一表
- (2) M.N. vol. III. Kāyagatāsati sutta p.90
- (3) Khuddaka-pāṭha p.2
- (4) 大正一九卷六七一頁
大正一卷七二三頁
- (5) M.N. vol. III. Dhātuvibhāṅga sutta p. 62
- (6) M.N. vol. III. Dhātuvibhāṅga sutta p. 240 (7) Visuddhimagga vol. I. p. 178
- (8) D.N. vol. I. Sāmanāphala sutta p.73 (9) M.N. vol. I. Malāssapura sutta p. 276
- (10) 大正一卷八五頁
putṭhājā を譲るに捨を入れらるるは誤りであらう 小乘佛教思想論六二六頁
- (11) Vism. vol. II. p. 528 木村博士が Sukhadukkhapaccu-
- (12) S.N. vol. II. p. 95
- (13) 大正一七卷三七一頁
- (14) Samantapāśādikā p. 143
- (15) 木村、小乘佛教思想論一五九頁
- (16) S.N. vol. V. p. 80
- (17) S.N. vol. V. p. 420 佛誕一千五百年記念學會、佛教學の諸問題三五頁參照
- (18) M.N. vol. III. p. 248
- (19) S.N. vol. II pp. 1-2
- (20) A.N. vol. I. p. 177
- (21) S.N. vol. V. p. 430
- (22) 大正一卷一 1〇頁
- (14°) 佛教學上の諸問題三七一頁

【三】

四念處を説く他の文献に是を自燈明・自歸依・法燈明・法歸依の内容となすものの存することは既に述べた所である。勿論自燈明・自歸依の内容にも例外は存するが一般には四念處を擧げてゐる。其の例の最も著しきものは佛陀が入滅に先だつて説かれたる巴利大般涅槃經⁽¹⁾や漢譯遊行經中の文献である。其の文例は既に擧げたところであるが、この他巴利長部二六轉輪獅子吼經⁽⁴⁾漢譯長阿含六卷轉輪聖王修行經・相應部四七の九及び一三・雜阿含二四卷六三八經等にも存する。⁽⁵⁾特に後者の二經は舍利弗般涅槃後是に關する佛陀の教説を載せてゐるのである。かくの如く自燈明自歸依法燈明法歸依が般涅槃と結合して述べられてゐる理由は如何であらうか。思ふに大般涅槃經に存するやうに佛滅後に於ける教徒の指導原理は實に法と律とである。殊に法を依處とすべきは言ふまでもないことである。其の法の中でも代表的なものはかの四聖諦である。四聖諦中の道諦の内容は八正道であるから、その内には律までも含まれてゐるのである。かくの如く重要な教説を内容とする四念處が、滅後に於ける教徒の指導原理とされるは蓋し自然の數であらう。然らば自燈明自歸依は如何に解すべきであらうか。相應部二二の八七には「法を見るものは我れを見、我れを見るものは法を見る」⁽⁸⁾ (Yo kh) dhammam passi so mani passati yo mani passati so dhammam passati.) とあり、增一阿含一〇卷に「已其觀法者則觀我。已有法則有我」とある。勿論漢巴兩象跡喻經に存する如く法の内容を緣起としても何等差はないが、眞に法を體驗身證したる者は本來の自己を捉へ得たるものであると言はねばならない。羽溪博士⁽¹¹⁾は自燈明自歸依を以て本具佛性の根據とせられてゐるが見方によつてはかく立言することも可能であらう。宗輪論には大衆部の唱

へたる所として心性本淨説を擧げてゐるが理想的立場に立てる大衆部の主張としては當然であらうと思ふ。他面より考ふるも佛教は決して婆羅門の如き神に依ることなく、自らの力によつて、内なる本質的自己を信じ、それを全體的に顯現することを高潮するのである。蓋し佛教は天啓や祈禱に基く神本位の宗教にあらずして、禪定と自覺に基く人間本位の宗教であるからである。けれども相應部二二の四三自燈明には五蘊に關係する二十種の我見を捨離することとなす異例も存する。何れにしても、四念處を自燈明法燈明の内容となす所以は身受心法中に自己と法とが含まれてゐるからであらうと思ふ。尙附言するならば四念處を主として説く文献では八正道は勿論法念處中に含まるべきであるが、四聖諦や八正道に重きを置く中部一四一分別聖諦經の如き經典が、四念處を正念中に攝してゐることも注目に値する。

次に四顛倒を對治せんが爲に四念處を修すといふ説に就て一言したいと思ふ。四顛倒 (*cattāro vipallāsa*) は巴利增支部四の四九や大集法門經等が説いてゐる如く、無常なるものを常住なりとし、苦なるものを樂なりとし、無我なるものを我なりとし、不淨なるものを清淨なりとする謬見をいふのである。右の四顛倒は想・心・見の三種に就て言はるが故に總じて十二となるであらう。何れも佛陀の根本思想に違反するものであつて初期に於ける佛教の均しく排撃する所である、併し大乘涅槃經等に到れば法身常住の標識を高く掲げ、内在的理想態たる佛性に就て常樂我淨を談する同一佛教内に於て全く相反する二つの見解が認容されてゐるこの矛盾を解除するものは實に般若の空觀であらねばならない。

けれども佛陀の成道以前に立場を置く初期の佛教に於ては文字に現はれたる如き大乘涅槃經の説は四顛倒として退けるのである。而して部派佛教になれば四顛倒を對治せんが爲に四念處を修すの説が漸く明かとなつて來たのである。即

ち婆沙論一八七卷雜阿毘曇心論六卷等には「謂對_下治於_ニ不淨_ニ淨想顛倒_上故說_ニ身念住。對_ニ治於_レ苦樂想顛倒_レ故說_ニ受念住。對_下治於_ニ無常_ニ常想顛倒_上故說_ニ心念住。對_下治於_ニ無我_ニ我想顛倒_上故說_ニ法念住」とあるが如き是である。かく四顛倒と四念處とは元來別々に唱へられたるものとの結合であるから其の組合せに多少不自然なところが存するやうに思ふ。

巴利文に從へば身念處中には念安般・威儀・正知・厭逆作意・界作意・死屍觀等が存するが淨顛倒を對治するには特に死屍觀厭逆作意が其の主要なるものとなるのであらう。受念處中には樂受・苦受・不苦不樂受が存するが樂顛倒を對治するには特に苦受が選ばれねばならない。心念處中には相反する心の種々相が擧げられてゐるがそれらは何れも無常なる性質のものであるから、これを觀することは軽て常顛倒を對治するに到るであらう。法念處中には五蘊・五取蘊十二入・七覺支・四聖諦等が說かれてゐるが我顛倒を對治するには五蘊・十二入等が其の主なる觀處となるであらう。勿論會通出来ないことはないけれども右の組合せは必らずしも完璧なものではないと思ふ。總別何れの念處も原始佛教時代に明確に存したものでなく部派佛教時代に入つてより後の組織であることは注意すべきであらう。

次に四念處は觀心や觀法であつて廣き意味に於ける禪定であることに就て述べて見ようと思ふ。巴利念處經では最初の念安般に先だつて森林又は樹下乃至空屋に入りて、結跏趺坐し、身を正し念を現前に確立することを述べてゐる。漢譯のそれには「齒々相著。舌遍⁽¹⁹⁾上齶。以^レ心治^レ心。治斷減止」とある。これは譏身足論一卷に「以^レ齒持^レ齒。舌端著^レ齶。復以^ニ其心。降伏執持。調^ニ練^ニ其心」とあるのに殆んど一致する。更に漢譯身念處中に擧ぐる離生喜樂・定生喜樂・無喜生樂・淨心遍滿等はそのまゝ初禪より四禪迄を示すのである。尙増一阿含壹入道品に載せらるる四念處中の法念處には明

かに四禪が説かれてゐるのである。上に述べるが如き例によつて知られるやうに四念處は禪定と密接なる關係を持つてゐるのである。四念處には如眞に知るといふ語が多分に存するがこは禪定によつて得らるる正しき認識を意味する。思ふに如實知見を得んとするには必らず禪定が先行しなければならない。このことは相應部三五の九、九や同五六の一等

(22)

に「比丘等よ、當に三昧を修習すべし。比丘等よ、三昧を得たる比丘は如實に知見するなり」とあるによつて明かであらう。禪定を止と名づくるならば如實知見は觀と言ふべきである。固より止と觀とは均等を要するものであるが四念處は特に觀に重點を置くものである。⁽²³⁾俱舍論二三卷にも「依^ニ已修成^ニ滿勝奢摩他一爲^ニ毘鉢舍那^ニ修^ニ四念住」とあるは即ち是である。さて毘鉢舍那 (*vipassanā*) 即ち觀の内容は左の如くである。(一)法の固住性、法の定則性と言はる諸行⁽²⁴⁾無常・諸法無我・一切法苦の三特相を如實無倒に諦觀すること、(二)その三特相はそのまま緣起說である。これも亦三特相と同じく法⁽²⁵⁾の固住性、諦の定則性と言はる。そを如眞に認得すること、(三)右緣起說は亦四聖諦に外ならない。眞實⁽²⁶⁾・不虛妄・不異なるこの諦理を正當に認得すること、(四)三神變中の教識神變、三明中の漏盡智證明、六通中の漏盡通等は其の内容としての四聖諦を體認し、解脱に於て解脱したりと確信する智である。かくの如く佛陀の根本思想を如實に認識し體驗し更に解脱智を確得するは即ち毘鉢舍那⁽²⁷⁾である。四念處の法念處中の四聖諦は固より身・受・心各念處が内含する諸般の事項を如實に知ることも亦毘鉢舍那であらねばならない。更に身・受・心・法を不淨・苦・無常・無我と觀ずるも亦毘鉢舍那である。ダンマサンガニが言へる如く、觀が八正道の正見に關係することは明瞭である。けれども單に正見のみに限定することは出來ない。蓋し正見が正思惟以下正定を経て正智となつた時初めて眞實の般若と言ひ得るか

らである。故に觀は正見であると共に正見の完成したる正智であらねばならないであらう。それは明かに無明の滅であつて、慧解脱の完成である。前に四念處は成道を可能にする道であるといつたのも蓋し故なきにあらずである。以上の論述によつて明かるが如く四念處は廣き意味に於ける禪定であると斷言し得るであらう。思ふに教陀の宗教は教義や信條による宗教にあらずして、直ちに人間の宗教意識の自覺に訴ふる純粹體驗の宗教である。而してかかる體驗(Erlebnis)の眞髓をなすものは實に禪定でなければならぬ。蓋し禪定は佛教二卷に於て「他の宗教に取つて祈禱(das Gebet)」が宗教生活の核心をなせるが如く、佛教徒に取つて宗教生活の中心をなすものは實に禪定である」といつてゐるやうに、禪定を除ける佛教は全く其の根柢を失ふであらう。蓋し禪定は佛陀をして宇宙人生の眞理を徹見せしめ、菩提を内容とする偉大なる人格を完成せしめた根本契機であるからである。而して佛陀が聖なる實踐の道として説示せられたる八正道に於て、正定は自然的立場を克服して眞に佛陀の根本思想を我のものとする最後の道であり、不動の自覺に達する最後の心的統一である。禪定が欲望に基く意志を否定し、散亂してやまざる心の波を靜むる方面のみを見る者は是を以て消極的無爲に墮する弊ありとなすけれども、それは只一面のみを見て全面を知らざるものとの短見である。所謂物心二元論を斥け、常住我の存在を否定し、是を目的視されなかつた佛陀の禪定は進んで法の如實相を正觀し生活の即處即處に無限の生命活動を全現するものである。佛教が現實に即して力ある生命の宗教たる所以も亦茲に存するのである。この意味に於て四念處は禪定の積極的方面を強調する重要な實踐道であると言ひ得るであらう。尙四念處を雜阿含二七卷七一二三經等に基き七覺支と共に外學との共通思想となし其の起原を外道に求めんとする説もあるが併し一二⁽²⁹⁾

⁽³⁰⁾

の断片的文献によつて其の起原を定めることは至難であらう。私は引例の文献そのものからも又四念處の内容から言つても外學起原説にはかに同意することが出来ない。尙宗祖道元禪師の四念處に對する深遠なる見解も亦参考に價するものであることを茲に附記する。

(1) D.N.vol.II.p.100

(2) 大正一卷一五頁

(3) D.N.vol.II.p.77

(4) 大正一卷三九頁

(5) S.N.vol.V.p.154 p.163

(6) 大正二卷一七七頁

dīpa を燈とするか洲(島)とするかに就ては宇井博士印度哲學研究(四)一七二頁及び大谷大學マニューラ(三)一

貢泉教授の説参照

(7) D.N.vol.II.p.58 p.154

(8) S.N.vol.II.p.120

(9) 大正一卷六五二頁

(10) M.N.vol.I p.190 大正一卷四六七頁

(11) 思想六〇號一三八頁、佛性本具の思想に就て

(12) 婆沙二七卷大正二七卷一四〇頁、舍利弗阿毘曇論¹¹

七卷大正二八卷六七七頁 木村、小乘佛教思想論¹²〇〇頁 阿毘達磨論の研究一四九頁 Ka'havathu vol. I.
p.303 *Sekkasa asekkāññāpanī athi.*

(13) S.N.vol.II.p.42

(14) M.N.vol.II.p.252

(15) A.N.vol.I.p.52 *Patissambhidāma* vol.II.p.80 (註) 大正一卷二十九頁

- (17) 大正一一卷五九一頁 (18) 大正一二七卷九三二八頁
- (19) M. N. vol I. p. 56 D. N. vol. II. p. 291 (20) 大正一卷五八二頁
- (21) 大正二六卷五三四頁 (22) S. N. vol. VI p. 80 S. N. vol. V p. 414
- (23) 縮藏收十七十六丁裏 (24) A. N. vol. I. p. 266
- (25) S.N. vol. II. p. 25 雜阿含一一卷一九六經 大正一二卷八四頁
- (26) S.N. vol. V. p. 430 雜阿含一六卷四一七經 大正一二卷一〇一〇頁
- (27) A.N. vol. I. p. 61 Samathā ca viṭṭasāna ca 成實論十五卷大正三三一卷三五八頁
- (28) S.47. Oldenberg; Buddha S. 359 (29) 大正一二卷一九一頁
- (30) 渡邊、佛陀の教説三八七頁 (31) 八正道との關係 S. N. vol. V. pp. 177-178
- (31) 正法眼藏三十七品苦提分法 大正八一二卷一四四頁 秋山・道元の研究一九三頁參照